

バブルの時代を通り抜けてきた世代には、共通の喪失体験がある。
この十年の間に、私のまわりから多くの友人たちが消えていった。
憧れていた人物の生活が荒廃し、破滅していく様を見るのはつらいものだ。どんなに魅力的で、才能に溢れ、人生を謳歌する術を知っていても、時代を超えて輝き続けられる人はごくわずかしかない。
自分の人生について真剣に考えたのは、この頃だったように思う。
経済的な基盤がなければ、人は自由には生きられない。こんな単純なことに気づくまでに、ずいぶんと回り道をした。そして、自分の人生がいかに多くのものに依存しているかを知って慄然とした。
会社が倒産しても、あなたはまだ自由だろうか。年金制度が破綻しても、豊かな老後が約束されているだろうか。

誰もが心のどこかで、人生をリセットしたいと考えている。だが残念なことに、人生にはコンピュータゲームのようなリセットボタンはない。

私たちが暮らす高度化された資本主義社会では、人生を変えたいと望む人々のために、さまざまにコンビニエントな方法が用意されている。新興宗教、自己開発セミナー、携帯電話の出会い系サイト、薬物などはどれも、人生をリセットするためのお手軽な道具の一種だ。少し前には、「自殺すれば人生がリセットできる」とする本が、若者たちの間で圧倒的な支持を得た。

私たちは、これらの方法がすべて幻想であることを知っている。だがその一方で、どこかで人生を変える出来事を願ってもある。
昨日と同じ今日が、今日と同じ明日が永遠に続くとしたら、生きることの意味はどこにあるのだろうか？

誰もが、不安のない生活を望んでいる。だが、娯楽(不安)のない人生は堪え難いほど退屈にちがいない。

未来への言いしれぬ不安。それを人は「希望」と呼ぶ。

私も含めほとんどの人は正義のために生きてなどいない。自分と家族の幸福を守るために生きている。

たとえ遠い世界で多くの命が失われようとも、私たちの日常は変わらない。だから、ニュースを見ながら小さなため息をつき、日々の仕事へと向かうのだ。
理不尽な世界で、私たちは目の前にある問題を、一つ一つ解決していくしかない。

保険と宝くじは同じ仕組みだから、本来、保険で資産運用などできるはずがない。

蕎麦屋で鴨南蛮を頼むと、出てくるのはたいてい合鴨である。合鴨はアオクビアヒルとマガモを交配したもので、味は鴨肉に似ているが外見はアヒルそのものだ。アヒル蕎麦では気味悪がって誰も食べないから、たいていの蕎麦屋が鴨の名前を使っている。→名前と中身が違うことがある。用心、用心。

世の中には他人の不安をネタに商売している人がたくさんいる。恐怖に怯える人は、そこから逃れるために喜んで金を払うからだ。

不景気の日本で急成長を続ける業種のひとつは間違いなく不安産業だ。この有望市場に参入する業者も、保険会社、不動産会社、健康産業からマルチ商法、新興宗教まで多種多様だ。

不安産業が高成長を遂げたのは日本国政府の強力な支援を受けているからである。政府は年金問題をいつまでも解決しないことで国民を疑心暗鬼に陥れ、不安産業の業者に多大な収益機会を提供している。

不安を売る商人は、あなたの耳元で甘く囁く。

日本の財政は破綻して老後に年金をもらえる保証はありません。だから「自分年金」をつくりましょう。

銀行にお金を預けても利息なんてつきません。だったら、もっと儲かる投資をしませんか？

彼らの最大の商売道具は財政赤字と超低金利政策だ。日本国の財政破綻が騒がれれば騒がれるほど、彼らの懐には金が転がり込んでくる。この「神風」で、濡れ手で粟の大儲けをした業社も少なくない。

日本人の平均寿命はまだ延びています。医療費だって馬鹿にはなりません。将来のインフレも考えれば、安心して老後を過ごすには、少なくとも一億円の貯蓄が必要です。どうです？ちゃんと準備できてますか？

もちろん、準備などできているはずはない。そこで業者の提案する高利回り商品にすがり、大損したり、有り金をすべて巻き上げられたりするのだ。

そもそも生涯収入が三億円程度しかないサラリーマンが、退職時に一億円の資産を築くことは不可能に近い。不可能を可能にするには、博打で勝負するしかない。たいていの博打は、素人が身ぐるみはがされることになっている。

百万ドル(約一億円)の資産があれば、世界中のどの国でも富豪の仲間入りができる。日本はもうすぐ、ミリオネアでなければ生きていけない国になるらしい。

年金制度の矛盾は厚生年金に集中している。火事はここで起きている。だが住民であるサラリーマンは給料から間答無用で保険料を天引きされているため、避難することすらできない。

対して自営業者などが加入する国民年金は、加入者自身が保険料を納付する。所得にかかわらず保険料は定額(月額一万三千三百円)で、六十五歳から一定(月額約六万七千円)の年金を受け取る。定年直前まで受給額がわからない厚生年金と比べて、こちらははるかに明朗会計だ。

国民年金の場合、将来の保険料引上げを考慮しても、支払った額以上の年金が戻ってくる可能性が高い。そのうえ保険料は全額、所得から控除され、受給時にも公的年金控除の適用が受けられる。いずれも民間の保険会社ではあり得ない大盤振る舞いだ。

国民年金の保険料を支払うのは、経済的にはかなり合理的な選択なのだ。対岸の厚生年金で火の手が上がるのを見て、国民年金加入者は続々と逃げ出している。これはかなり皮肉な光景ではないだろうか。

日本には、人間の病院よりも立派な動物病院がいくらでもある。なぜこんな理不尽なことが起こるかと言うと、動物病院は自由競争、人間は平等が優先となるから。

米国では、目の前に理想的な病院があっても、ほとんどの人が恩恵を受けられない。最高の治療を受けるには金が必要だから。

日本人の八割近くが病院で死ぬ。終末期の医療費は一ヶ月百万円以上と群を抜いて

高額で、今後、高齢者の大半が病院死を選択すればその医療コストは数千億円規模になる。一ヶ月の医療費が一千万円を超えたケースのうち、半数以上が数ヶ月以内に死亡しているともいう。人は医療費の大半を、死亡するまでの数日間で使っている。

以前、知人に頼んで高校の授業を見学させてもらったことがある。そこは典型的な底辺校で、男子は金髪にピアス、女子は真っ黒な顔に超ミニスカートが定番だった。

教師は、教壇に立って教科書を朗読していた。それを聞いている生徒が最前列に一人か二人。マンガを読んだり、携帯でメールのやり取りをしている生徒が七、八人。あとは教室の後ろで車座になり、トランプや花札で遊んでいる。交互に教室を抜け出しては、廊下に煙草を吸いにいく。

知人によれば、この学級はまだマシな方だという。生徒が、教科書を朗読する教師の権利を尊重しているからだ。教師が生徒の自由を認めることで、暗黙の停戦協定が成立している。

昼休みには、生徒たちが校庭に屯(たむろ)して煙草をふかしている。その横を、教師が目を伏せて足早に通り過ぎていく。

生徒の喫煙を現認すれば、教師は違法行為をやめさせなければならない。現場を見なければ無用な衝突は起こらない。教師は職員室とクラスを往復するだけになり、昼休みや放課後は生徒の解放区だ。

ひと昔前に校内暴力が社会問題になったが、最近は教師に対する暴力はずいぶん減ったという。生徒への強制や抑圧が存在しないから、反抗する理由がないのだ。これこそまさに、民主教育の理想郷ではないか。

ルールも罰則もない自由放任の社会では、生徒は欲望や快楽を抑制する必要がない。弱肉強食の世界では、必然的に陰湿ないじめが発生する。だが高校は義務教育ではない。いじめの標的とされた生徒は学校に出てこなくなるだけだから問題にはならない。本人の意思に反して登校を強制すればそれこそ人権侵害である。

ゆとり教育の是非が問題になっている。だがいかに教える内容をやさしくしても、教師と生徒が同じ舞台上に上らなければ教育という営みは成立しない。

多くの学校が教育以前の状況にある。だが、その事実を気にかける人はいない。汚いものから目をそむけたいのは誰だって同じだ。

思春期の子供たちはさまざまな誘惑に晒される。都市部の公立中学では、最初の夏休みが終わる頃には黒い髪の子供はいなくなる。これはとくに女の子の親にとってはきわめて深刻な事態だ。

デフレ経済でモノの値段が安くなった。ハンバーガーが半額になったとしても給料が半分になるわけではないから、デフレは生活を豊かにするはずだ。しかし現実には、多くの家庭が生活の苦しさを訴えている。

家計が逼迫する理由は、デフレになっても減額されない大きな出費があるからだ。そのひとつが住宅ローンである。

ローンを組んでマイホームを買うと、その瞬間に負債が固定され、長期にわたる返済義務が発生する。バブル崩壊で地価が三分の一に下落しても借金の額は変わらない。その結果、マイホームの時価が残債を下回り、多くの家庭が債務超過に陥っている。

もうひとつの大きな出費は教育費である。

教育は医療と並んで人件費の占める割合が大きく、デフレでも価格が下がらない。ゆとり教育や学級崩壊で親の不安が増しており、中高一貫校の需要が高まっている。

教育はコミュニケーション産業であり、外国人労働者の活用でコスト削減を図ることもできない。

平均的なサラリーマンの生涯年収は三億円、税・社会保障費を除いた手取りは二億四千万円程度とされる。一方、幼稚園から大学まで私立に通わせると最低でも二千万円は必要だ。子供二人なら、教育費の合計は四千万円を超える。

三千万円の住宅ローンを三十年返済で借りると金利3%でも返済総額は四千五百万円。頭金や固定資産税、諸雑費を加えると定年までの住居費は六千万～七千万円。子供を私立学校に通わせながら、マイカーを買い、高額生命保険に加入すれば、それだけで収入のほとんどは消えてしまう。

年収十萬ドル(約一千二百万円)といえど欧米でも裕福な部類に入る。ところが日本には、昼食を百円玉数個で済ます年収一千万円のサラリーマンが溢れている。この不思議な光景に、バブル崩壊後の人生設計の困難が象徴されている。

贅沢を望まず、ささやかな家族の幸福を実現しようとする、そこに経済的困窮が待ち受けている。限られた収入の中で破綻を避けるには、支出に優先順位をつけるほかない。マイホームと教育投資のどちらを優先するのか。それが今、問われている。

現実には仮象であり、その背後に超越的な本質があると考えるのが形而上学だ。この国には、不動産の形而上学が蔓延している。

リゾートマンションが50万円で売りに出されているが、管理費が月額10万円誓うのがある。

世の中には、不動産を基準に職場や学校、家族の人数を決めている人がいる。自由なはずの人生がマイホームに従属するのでは、本末転倒ではないだろうか。

資本主義では、手法を問わず、法の許す範囲内でより多くの金を稼いだ者がゲームの勝者になる。結果は貨幣の増減で表され、敗者は退場を言い渡される。

すべてを金銭に還元して評価し、序列化する資本主義には一片の偽善もない。だが正しさも限度を超えると堪え難くなる。

夢だけを見て生きていくわけにはいかない。真実だけを突きつけられる世界は息苦しい。社会を支える相反するふたつのルールと上手に折り合いをつけるところに人生の知恵は生まれるのだろう。

太陽が地球の周りを回っていると信じて生きていくにはさして困らない。人は皆無味乾燥な科学より心躍るわかりやすい物語を求めている。

好むと好まざるとにかかわらず私たちはいずれ現役を引退し、第二の人生を歩むことになる。老後とは生活の糧を労働から得るのではなく、年金と資産運用のみに依存することだ。

老後は誰もが一人の投資家になる。成功の方程式はもはや役に立たない。その時、金融市場について何の知識もなければ、どうやって自分と家族の生活を守るというのだろう。

私たちが投資を学ぶ理由はここにある。

現実には、高利貸しにできることはひとつしかない。彼らは説教する。「貸した金を返せ。約束を守れ」と。それが暴力的に見えるとしたら、自宅や職場に押しかけ、債務者の前で、この掟を伝えるからだ。高利貸しの最大の武器は、皮肉にも"道徳的"な正しさにある。

債務者は、圧倒的な"道徳的"強者を前に弁明の余地のない場に晒される。違法な金利でも、自分の意思で契約した以上、一方的な違約を正当化する論理を私たちの社会は許容しない。こうして、債務者は終わりなき金策に奔走する。

金で時間を買うことをファイナンスと言う。

「人は常に他者の承認を求めて生きている」

バブルの最盛期に出会った地上げ師は「あんたもダニやウジ虫以下の人間になればカネしかないとわかるさ」と言って、夜ごと銀座の高級クラブで花咲か爺さんのように一万円札をばら蒔いていた。彼は薪の代わりに暖炉にくべるほどの札束を持ち歩いていたが、大して幸福そうには見えなかった。その時ようやくヘーゲルの言葉が理解できた。彼はカネで買えるすべてのものを持っていたが、他者の承認だけは得られなかった。

ところで、あなたの欲望が他人の欲望であり、あなたの幸福が他人の幸福だとすれば、あなたはいったいどこにいるのだろうか？ 豊かな社会では「自分探し」の旅が流行するが、たいていの場合、探すべき自分は最初から存在しない。

プラトンの幸福は、「真善美」を体験する事。

私を含めほとんどの人は、他人から後ろ指を指されるような仕事をしてまで金を稼ごうとは思わない。羨望の対象となるステイタスの高い仕事に就き、クーラーの効いた快適なオフィスで働き、大した苦労もせずに金持ちになりたいと考えている。当然、こうした恵まれた仕事は競争率が高く、成功する人はごくわずかだ。

世の中には、働かずに投資だけで生活したいと考える人も多い。だが、マーケットはプロと素人を区別してくれない。株の本を一、二冊読んだだけで、生活をかけたプロたちが参戦する市場でコンスタントに勝てるわけがない。そんなリスクを冒すくらいなら、これまでの経験を活かし、自分が優位性を持つ仕事で勝負した方がずっといいだろう。

市場の歪みを利用して確実に利益を積み上げていく手法をアービトラージ(裁定取引)と言う。この方法の素晴らしいところは、人よりも早く市場の歪みを見つけられれば、ほぼ確実に儲かることだ。ただし短所もあって、ひとたび収溢機会が知れ渡ると、多くの投資家がそこに殺到し、チャンスはあっという間に消滅してしまう。当然、私がかもし新たな市場の歪みを知っていたとしても、それを本に書いたりはいしない。

2000年秋の日経平均銘柄の大幅入れ替えでは、ルールで機関投資家は銘柄変更の当時まで売買を行なえなかった。値上がりする株、値下がりする株は歴然としていたから、

誰でも1ヶ月で30%を超える利益を手に出れた。

年金制度に関する議論が喧(かまびす)しい。厚労省(旧厚生省)や社会保険庁による保険料の流用疑惑や、国会議員の年金未納問題が憤激を呼んでいる。国民の財産である保険料での遊興が許されるはずもないし、政治家が国民の義務を放棄するのは論外だ。しかし、マスコミの執拗な報道にもかかわらず、年金制度批判にはどこか虚しさがつきまとう。なぜだろうか？

その理由は簡単に説明できる。議論とは、問題を解決するために行なうものだ。解決の可能性がない問題を議論するのは時間の無駄である。年金問題はその典型だ。

このところ、土地活用に悩む資産家の間でグループホームが注目を集めている。立地条件が悪ければ、アパートを建てても入居者を集めるのは容易ではないが、痴呆高齢者向けの施設であれば入居希望者はいくらでもいる。運営費の九割は介護保険から支払われるから、安定した家賃収入を確保できる。そのため、都市の郊外を中心にグループホームの建設ラッシュが始まっている。近郊から入居者が集まってくれば、自治体の保険財政は大きく圧迫される。

介護保険は、集めた代金以上に賞金を支払う持続不可能な宝くじである。この大盤振る舞いの仕組みを理解すれば、金儲けに利用するのは難しくない。こうした企業家の存在によって、介護保険は国民負担を積み上げ、日本国の将来に大きな傷を残すだろう。

介護を国営保険事業にすることで、高齢者の福祉は向上した。しかしその代償は、あまりにも大きい。